

時間と空間の「継ぎ木」が生み出す都市空間の奥行き

野原 卓

未来から過去へと歴史を紡ぐ1本の「糸」

JR川越駅に降り立ち、人の流れに沿って向かうと出くわすのが、賑わいのはみ出す通り、クリアモール（市道1342号線）である。両側に店舗のひしめく幅員6mの道路が約1kmまっすぐに続くこの通りは、1999年に一方通行のモールとして再生された（現在、第2期工事〔750m分〕まで完成）。百貨店と生活雑貨の交ざり合う商店の町並みと、道に所狭しとせり出す看板が、朝から夜まで活気溢れる商店街をさらに演出している。

通りをそのまま北に歩くと、重厚な洋風建築と蔵の並びが現れる。かつては銀座商店街と呼ばれた街道筋、「大正浪漫夢通り」である。以前かかっていた全蓋開放型アーケードは1995年に撤去され、町家造りや洋風の看板建築が軒を連ねるレトロな町並みが再び目の前に現れた。その後、「歴みち事業」¹⁾によって、御影石の石畳、電線地中化などの街路事業が行われただけでなく、商店街を中心に「大正浪漫のまちづくり協定」が策定された。運営組織として大正浪漫委員会が設立され、民間同士でありながら、建て替え時に意匠のチェックを行う、積極的な管理運営が実現されている。

突き当たりを蔵に沿って左に曲がると、黒色の町並み、「一番街」通りに入る。物資の集散地として商業を中心に栄えたこの通りでは、江戸期から度重なる火災の後、1893（明治26）年の大火時に、蔵造りの建物が被災しなかったことで、火災に強い蔵造りの建物（店蔵）が急速に広まった。最盛期には100棟近かったと言われる重厚な蔵造りの町並みは、戦後の都市化や駅前開発からも距離があったことから、幸いにも現在に受け継がれ、1999年、重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）の指定に至る。

このように、川越の中心市街地は、現代の商店街から大正、明治、そして江戸までタイムスリップする「1本の糸」によって紡がれている。

都市計画道路変更と街路空間の継承

一番街通り（都市計画道路中央通り線）は、現況は幅員約9.5～11mであるが、1936年には11m、そして1962年には幅員20mで西側に拡幅する都市計画決定がなされている。これが計画通りに実施されると、蔵造りの町並みは失わ

れてしまうだけでなく、仮に蔵が残ったとしても、街路空間は大きく変質してしまうことが予想された。

この通りは、広域交通上も重要な県道であり、代替路線がない限りは拡幅の縮小は難しいものであった。そこで、市内交通と通過交通が混在することで機能低下を招き、そのために負荷の高かった中央通りをはじめとする川越市の交通網に対して、外環状線・川越環状線・中環状線という3つの環状線とこれらへのアクセスを整備し、交通負荷の整理を行うことで、一番街への負担を減らすことが計画され、現道維持への素地が整えられた。

これを前提として、一番街通りを含む都市計画道路の見直しを検討された。商店街でもある一番街通りでは、2車線対面通行は維持しつつ、可能な限り歩行空間を確保することが求められた。拡幅可能な一定の区間は幅員14mを標準とし、そのほかの区間は12mの縮小幅員、そして拡幅によって歴史的建造物を損なう恐れのある区間は例外的に現況幅員を計画幅員とする凸凹型の都市計画道路として、1999年に伝建地区指定と一体的に都市計画変更が行われた。

こうして、必要となる都市機能を検討しながらも、昔ながらの町並みと街路空間が継承されたのである。

伝建地区指定への道のり

一番街の町並み保全は、古くからあるように見えて意外と新しい。30年前、この街もほかの古い商店街と同様、面取りと呼ばれる看板やパラペットで町並みは隠され、歴史的価値は認められていなかった。60年代以降、まちの中心部も川越駅周辺に移り、近代化の波が、まちを変質させていた。70年代には、同地区において伝建地区調査（1975年）がすでに行われていたものの、指定は見送られた。地域住民の合意が得られなかったのである。しかし、一番街付近でのマンション建設が、地域住民にも町並みの破壊と商業地の衰退を実感させ、町並みを考える契機となった。1983年、「川越蔵の会」が設立され、「商業活性化による景観保全」を掲げながら、商業と景観の両立を目指した活動が始まる。その後も商店街を中心としながら、地域の住まい方をパートナーとして整理した「町づくり規範」（1988年）が策定され、「町並み委員会」が個別の建て替えや改装を指導するといった積み上げを経て、ようやく、1999年の伝建指定に至

る。

現在の一番街は、一見多数の蔵造りの建物が残されているように見えるが、実際に残っているのは、最盛期を大きく下回る、30棟を超える数にすぎない。それでも一番街が「町並み」たるその理由は、まちづくり規範をはじめとした取り組みの積み重ねにより、新たな建て替えの建物も、時代の継承を意識して建てられていることにある。中には、一見すると、古い蔵なのか、新築の建物なのか区別のつかないものもある。

都市の「構造」を受け継ぐ

— 寺町と横丁による面的なネットワーク

もともと城下町であるこの地の都市構造の骨格は、江戸期の町割にある。寛永（1624～44年）期の大火の後、松平信綱によって行われた町割では、城の南北に武家地を配置し、「十カ町四門前」と呼ばれる、町人街の上五カ町、職人街の下五カ町、養寿院・行伝寺・妙養寺・蓮馨寺という四寺院の門前町がつくられた。そのため、メインの街道筋は両側から寺町に挟まれ、脇道が参道となっているという都市構造を有していた。メインの通りから寺院への参道が横に伸びてゆくこの横丁の構造による面的ネットワークが、まちの魅力をつくり出している。現代においても、「歴みち事業」によって、養寿院門前通り・長喜院門前通り（1992年）、行伝寺門前通り（2001年）などが整備されており、この横丁の空間構造の継承が、いまでも活力持続の鍵になっているのである。特に、昭和初期からお菓子の卸屋が集積していたものの、数十年前にはほとんど活気の失われていた菓子屋横丁の再生（1991年）や、江戸期からまちの時間を刻み続ける「時の鐘」のある鐘つき通りの再生（2003年）などによって、いつでも人の絶えることのない通りが生まれている。

蔵造りの背後に眠る空間構造

黒漆喰に覆われた切妻平入りの店蔵が隙間なく並ぶ川



歴史ある町並みを現代に継承させた「F Gallery」の空間

1638	寛永の大火の後、松平信綱により町割実施
1893	川越大火により市街地の3分の1が焼失し、蔵造りが普及
1970年代	デパート、銀行などが川越駅周辺に移転
1971	大沢家住宅が重要文化財に指定
1975	文化庁による伝統的建造物群保存地区調査
1983	「川越蔵の会」設立
1987	一番街商店街町並み委員会発足
1988	一番街「町づくり規範」の制定
1991	歴みち事業整備（～1992）
1999	都市計画道路中央通り線の都市計画変更、伝統的建造物群保存地区の都市計画決定（重伝建に選定）
2001	歴みち事業整備（～2003）

越の町並みは、このまちが持つ魅力の表層にすぎない。その奥には、川越の風景をかたちづくる構造が眠っている。

67項目にわたる「まちづくり規範」の中の1つに「4間ルール」がある。街路沿いに間口の狭い細長い敷地が並び、その敷地の中では、道路沿いから順に4間ずつ、「店（蔵造り）—住まい—中庭—離れ—蔵」と並び、南側に通り庭を設けるといった空間構造の規範である。この構造の集積が、川越の奥行きと深みのある都市空間を生んでおり、このルールを建て替え時にも継承することが、川越ならではの風景を奥から支えているのである。2005年、一番街通り沿いの、以前は駐車場だった土地に、この空間構造を継承するギャラリー（F Gallery）が現れた。壁面線を連続させ、ガラスの勾配屋根により連続性を確保しながら、前土間に当たる空地から通り庭を経て奥に中庭を持つ空間は、現代的でありながら、川越の空気を受け継ぐ試みがなされている。

このように、川越では、都市空間の構造を活かすことによって、都市生活の歴史と文化が積層され、奥行きのある魅力を持続させているのである。

注

¹⁾国土交通省の事業「身近なまちづくり支援街路事業（旧・歴史的地区環境整備街路事業）」の通称。

参考文献

- 1) 川越市教育委員会編「蔵造りの町並み—川越市伝統的建造物群に関する調査報告書—」川越市文化財保護協会、1976年
- 2) 川越市一番街町並み委員会「川越一番街町づくり規範」1988年
- 3) 新谷洋二「歴史を未来につなぐまちづくり・みちづくり」学芸出版社、2006年